

① 退屈（たいくつ）

「退屈」という言葉は、「つまらなさや暇に、飽き飽きしてしまう」という意味合いで使われます。

この「退屈」は、もともと仏教の言葉で、「修行のあまりの難しさに、くじけてしまう」という意味で使われます。「退屈」の字のごとく、修行の困難さに「退^{しりぞ}き屈^{くつ}して」しまうのです。

仏教の教えには、三つの「退屈」の心が示されています。

一つめは、さとりの世界にふれ、その深さ広さに退屈してしまう心。二つめは、限りのない修行に退屈してしまう心。三つめは、自分の行いがさとりに変わっていくことが理解できず退屈してしまう心です。

この退屈の心乗り越えることができなかつたら、きっと、うつうつとなすことも無く、日々を過ごしてしまうでしょう。

このことから、「つまらなさや暇に、飽き飽きしてしまう」という、現在の使い方によって変わっていったと考えられます。

仏教の使い方にして、現在の使い方にして、「退屈」を乗り越えて生活してゆきたいものです。

② 実際（じっさい）

「理論と実際とは違う」「実際はたいへんなことだ」といった時の「実際」は、「現実の様子・事実」という意味や「ほんとうに」という意味をもつ言葉です。

この「実際」は、そもそも仏教の言葉で、古いインドの言語である、サンスクリット語の、「ブータ・コーティ」という言葉を訳したものです。

「ブータ・コーティ」とは、“究極のさとり”という意味で、「真^{しんじつ}実^{まこと}の際^{きわ}」すなわち“究極の真実”という意味の「実際」という字に訳されたのです。

理屈だけの論議や、中味のない考え方とは対極にあるのが、“究極のさとり”・“究極の真実”である「実際」なのです。

そのような意味を持つ「実際」が、「現実の様子・事実」や「ほんとうに」という現在の意味で使われるようになっていったのです。